

## 1 黒斑病

### A 生態と防除のねらい

- 1 枝の越冬病斑から溢出した病原菌が、雨滴などの水で伝播し、気孔や皮目、傷などから侵入して発病する。
- 2 枝の病斑は、水浸状のへこみ、亀裂、かいよう様の膨らみ、樹脂の分泌などを呈する。
- 3 病斑部分の切除、防風対策など、耕種的防除と薬剤による防除を併せて実施する。品種によって発生程度に差が見られ、「ビューティ」「大石早生」「旭光」「紫玉」「ケルシー」「ハニーローザ」等では、比較的発病しやすい。

### B 耕種的防除法等

- 1 せん定時に病枝を除去する。
- 2 風当たりの強い園で発生が多いので、防風対策を行う。

### C 薬剤防除のポイント・注意事項等

初期防除に重点をおく。

使用時期	農薬系統・一般名	FRACコード
4月中旬～5月中旬	抗生物質剤	25、41
	抗生物質混合剤	41・25
秋期	銅剤	M1

## 2 ふくろみ病

### A 生態と防除のねらい

- 1 形成された胞子が、枝などに付着したまま越冬し、翌年の発生源となる。
- 2 落弁期頃から果実において発病し、まれに葉でも症状が見られる。降雨が多いと多発する。
- 3 被害果は放置せず除去し、園外で処分する。

### B 耕種的防除法等

り病果実は見つけしだい園外に除去する。

### C 薬剤防除のポイント・注意事項等

- 1 2月中旬（休眠期）の防除を徹底する。
- 2 散布ムラがないよう枝先まで丁寧に散布する。

使用時期	農薬系統・一般名	FRACコード
2月中旬 (休眠期)	硫黄	M2
	有機硫黄・チオファネート系混合剤	M3・1

### 3 灰星病

#### A 生態と防除のねらい

- 1 伝染源は、前年に地表面に落果した被害果実上に形成された菌核、および枝病斑である。
- 2 開花期と収穫前に発病するが、成熟果での発生が最も多い。特に収穫前に降雨が続く裂果すると多発することがある。
- 3 腐敗が進行すると樹上でミイラ状になり、果梗から転移して枝で病斑を形成することもある。

#### B 耕種的防除法等

- 1 枯枝や病斑が形成された発病枝は、せん定時に除去する。
- 2 発病した花や果実は園外に処分する。
- 3 地表面に落下した被害果は、伝染源になるので土中に埋めるか園外に処分する。

#### C 薬剤防除のポイント・注意事項等

予防散布に努める。

使用時期	農薬系統・一般名	FRACコード
開花期	ジカルボキシイミド系	2
収穫前	DMI剤	3
	QoI・SDHI混合剤	11・7
	グアニジン類剤	M7

### 4 炭疽病

#### A 生態と防除のねらい

- 1 果実および葉に発生し、6月頃の幼果では数mm程度の黒褐色の陥没病斑がみられる。葉では灰白色から茶褐色の病斑がみられ同心円状の輪紋が形成される。
- 2 収穫期前に果実での発病が多くなる。

#### B 耕種的防除法等

- 1 雨除け栽培は、本病の発生防止に効果がみられる。
- 2 過繁茂に注意し通風採光に努める。
- 3 発病果は伝染源となるので、見つけ次第園外に処分する。
- 4 せん定時は枯枝をせん除する。

#### C 薬剤防除のポイント・注意事項等

梅雨期の防除に重点をおく。

使用時期	農薬系統・一般名	FRACコード
収穫前	QoI剤	11

## 5 ウイロイド病（ホップわい化ウイロイド：HSVd）

### A 生態と防除のねらい

- 1 スモモに感染した場合、病徴は主に果実に現れ、斑入果症状や黄果症状、糖度低下を引き起こす。
- 2 病徴の種類や強さは、品種や気象条件によって異なるが、「ハニーローザ」や「貴陽」では、症状が比較的強く発現する。
- 3 はさみやノコギリ等に付着した汁液によってウイロイドが伝播する。せん定作業は樹毎に行い、その都度器具を消毒する。
- 4 本ウイロイドに感染した樹は、改植を行う。

### B 耕種的防除法等

- 1 ウイルスに感染した苗や穂木によって伝播するため、無病健全苗を使用する。
- 2 汁液による伝染を防ぐために、せん定時（夏季剪定も含む）にはノコギリやハサミ等の刃部分を次亜塩素酸ナトリウム水溶液等に浸漬して消毒する。消毒は1樹毎に行うこと。

## 6 アブラムシ類

### A 生態と防除のねらい

- 1 新梢伸長期から、モモアカアブラムシおよびモモコフキアブラムシの発生が見られる。
- 2 モモコフキアブラムシは、収穫期まで発生し、排泄物によるすす病の原因となるので注意する。

### C 薬剤防除のポイント・注意事項等

使用時期	農薬系統・一般名	I R A Cコード
4月～6月	ピレスロイド系	3 A
	ネオニコチノイド系	4 A

## 7 シンクイムシ類

### A 生態と防除のねらい

- 1 ナシヒメシンクイは年4～5世代発生する。
- 2 ナシヒメシンクイはフェロモントラップを利用して、発生消長を把握できる。

### B 耕種的防除法等

- 1 ナシヒメシンクイは園周辺のサクラ、ウメ、ナシ等にも寄生するため、これらの植物が発生源とならないように管理を徹底する。また、芯折れは、切り取って園外に除去する。
- 2 粗皮削りをして越冬幼虫を捕殺し、越冬密度を低減する。
- 3 古袋、被害果は園外に処分する。

### C 薬剤防除のポイント・注意事項等

果実に被害を与える第1世代（6月中旬）を中心に防除する。5月中旬から8月上旬にかけて発生消長を把握し、適期防除に努める。

使用時期	農薬系統・一般名	I R A Cコード
5月中旬～8月上旬	ピレスロイド系	3 A
	ネオニコチノイド系	4 A
	ジアミド系	2 8

## 8 カメムシ類 (チャバネアオカメムシ、ツヤアオカメムシ、クサギカメムシ)

### A 生態と防除のねらい

- 1 チャバネアオカメムシ、ツヤアオカメムシ、クサギカメムシが主体である。園周辺のヒノキ、スギの球果に産卵して、幼虫期を過ごす。
- 2 越冬してきたカメムシ類が果樹園に飛来し被害が発生する。越冬量が多い年には、幼果期から収穫期まで飛来が続くので注意する。
- 3 年によりその越冬量や次世代の発生量が大きく異なるため、生育期を通し注意が必要である。

### B 耕種的防除法等

ヒノキやスギを防風樹にしている場合は、管理を徹底し、結実をさせないか、できるだけ除去する。

### C 薬剤防除のポイント・注意事項等

- 1 地域や園の条件でも飛来密度が異なるため、5月から8月にかけて園内を良く見回り、発生を認めたら、直ちに防除を行う。
- 2 病害虫防除所からのカメムシの発生情報（病害虫防除所のホームページ (<http://www.jppn.ne.jp/kumamoto/>)）に注意し、防除を行う。

使用時期	農薬系統・一般名	I R A Cコード
5月～8月	ネオニコチノイド系	4 A

## 9 ウメシロカイガラムシ

### A 生態と防除のねらい

幼虫は、4月下旬から5月上旬、6月下旬から7月上旬、8月下旬から9月上旬の3回発生する。

### B 耕種的防除法等

- 1 ヒメアカホシテントウなどの有力な天敵を保護し、天敵に悪影響の小さい薬剤を選択し防除する。
- 2 寄生が多いと防除効果が低くなるので、ワイヤーブラシなどでカイガラをこすり落とす。

### C 薬剤防除のポイント・注意事項等

薬剤散布では、成虫に対する効果は低いので、幼虫期に防除を行う。

使用時期	農薬系統・一般名	I R A Cコード
1 2月 (休眠期)	マシン油乳剤	なし
4月下旬～7月上旬	ネオニコチノイド系	4 A
8月下旬～9月上旬 (収穫後)	昆虫成長制御剤 ネオニコチノイド系	1 6 4 A